

第一章

「ああ……そこよ。もっと、もっと強く……ああん……気持ちいい……だめ、だめ……イクイクイク！」

今日も思春期の可愛い男の子に激しく突かれる場面を妄想してオナニーをしてしまった。

私は母性本能がやたら強いところがあり、年下の男の子が大好きだ。それも、高校生くらいの思春期真っ盛りの男の子にたまらなく萌えてしまう。

膣から指を抜くと、指先がふやけて白くなっていた。今日は少し激しくやりすぎた。絶頂に達して火照った身体がクールダウンするにしたいが、正気に戻った私は、いつもの自己嫌悪感に襲われた。

私は二十六歳になる養護教諭、つまり、保健室の先生。私立の共学校に勤めている。

「やっちゃった……」

ため息をついて立ち上がり、バスルームに向かう。裸体を鏡に映す。自分で言うのもなんだが、顔もスタイルも悪くない。同僚の女教師と比べてもそこそこの線を行っていると思う。

このスタイルを維持するために、学校が終わると、エアロビクスとスイミングに通っている。おかげで、十代後半のときのボディサイズをそのまま保つことができている。

バストは八十八センチEカップで、形も崩れていない。ちょっと派手な、花柄のビキニの水着でプールサイドを歩いていると、男性の突き刺すような熱い視線を全身に感じる。そんな私の水着姿を見て、若い男の子の股間がパンパンに膨らましているんだと思うと、すぐに濡れてしまう。

私が通っているスイミングスクールに、以前から気になる男の子がいる。地元の公立高校に通っているらしい。彼の態度を見てみると、どうやら彼のほうも私のことに興味があるようだった。時折、私の水着姿をちらちら盗み見しているようだ。

彼が友だちと話しているのを聞いて、勝敏という名前であることはわかってきた。

甘いマスクに、水泳で鍛えられた逞しい身体。

実は私が、いつも妄想の中で抱かれている相手は、彼だった。

一見もてそうに見えるが、私と目が合ったときに見せるはにかんだ笑顔から、私は彼が童貞だと確信していた。

(彼におちんちんを思いきり突っ込んでもらいたい……)

そんなことを本気で考える私を、学校に生徒や同僚の誰が想像することができようか。私はなんと悪い先生なのだろう。

ある暑い日、スイミングスクールが終わった帰り、出口で偶然彼といっしょになった。私を見て恥ずかしそうに顔を赤くする彼。そんな彼のはにかんだ姿を見て胸がドキッと、身体の奥がじんとした。

(ようし……)

私は勇気を振り絞り、思いきって声をかけた。

「勝敏くん？」

「……はい……？」

彼は一瞬驚いたように振り向いて私の顔を見た。その笑顔に胸がキュンとなる。

「きょうはお友だちと一緒にじゃないの？」

「はい……僕だけちょっと遅くなってしまって……」

「そう……。勝敏くんって、泳ぎ上手ね」

「そんなこと……ないです……」

はにかんだような様子がかわいくてたまらなかった。子宮がずきんと疼いた。

「よかったら私が車で送ってあげようか」

「はい……でも……」

彼はまた下を向いた。

「こんなおばさんじゃ、いやなの？」

「いえ、そうじゃなくて……ご迷惑かと……」

「遠慮なんかしないでいいのよ。さぁ行きましょう」

「はい……」

彼とふたり駐車場へ向かい、私が先に車に乗り込んだ。アウトドア派の私は親からもらったセダンのほかにワンボックスにも乗っていた。

「さぁ、どうぞ……」

まだ遠慮している彼に、私は身体を伸ばして助手席のドアを開けた。

「あ……はい……」

身体を伸ばしたとき、ゆったりしたブラウスの胸元から、自慢のバストを覆うレースのブラジャーをわざと彼の目に入るようにした。

「私、いくつに見える？」

エンジンをかけて、彼に聞いてみました。

「二十二、三くらいかなって思っていました」

「うふふ……少しうれしいわ……」

「まさか……三十まで行ってませんよね？」

「行ってたらどうするの？ 車降りる？」

「そんな……」

「あとで教えてあげる……」

私は車を出した。彼は、助手席から私のほうをチラチラと何度か盗み見た。シートベルトをかけると、バストの膨らみが強調され、横から見るとそれがはっきりとわかるはずだ。

鮮やかなピンク色のミニスカートから伸びるむっちりした白い太もも、彼の熱い視線にさらされているのを感じ、身体の奥が疼いた。

「勝敏くんは、私みたいな年上の女性、どう思う？」

私は、黙っている彼に声をかけた。

「綺麗だし……その……スタイルもいいし……」

「嬉しいわ……だから？」

「だからって？」

「好き？」

「え……」

「嫌いななの？」

彼のもじもじする姿を見ていて、私は次第に意地悪したくなってきた。

「そんな……ええと……好き……です……」

「うふふ……」

私は意味ありげに薄く笑うと、そのまま、しばらく走り続けた。

「あの……方向が……」

「少しくらい遅くなってもいいでしょう？」

「はい……」

「ちょっとドライブしない？」

「はい……」

私は、車を人気のない、公園の裏の駐車スペースに止めた。

「勝敏くんは、セックスしたことある？」

「えっ？」

彼は驚いて、恥ずかしそうに俯いてしまった。

「あの……まだないです……」

「彼女は？」

「……いません……」

予想が当たった。

「勝敏くん、モテると思うけどなあ……」

「そんなこと……ないです……」

「勝敏くん……キスしていい？」

「えっ？」

私は返事も聞かず、助手席の彼にいきなり抱きついてキスをした。驚いた彼は身体を硬くしたが、抵抗することなく、私にされるままになっていた。私は、もう自分自身を抑えることが出来なかった。

「勝敏くん、心配しないで私に任せてね」

「……」

「もう堅くなってるわ……」

ジーパンの上から彼の股間をまさぐると、鉄の塊のようになっていた。

「あ……あの……」

「お姉さんに見せてくれる？」

「で、でも……恥ずかしい……」

「いいから……」

そうって、私は無理やり勝敏くんのジーパンのファスナを下ろした。

「う……ううう……」

声はあげるが、抵抗することもなく彼はされるがままになっていた。

トランクスの上から塊を撫でると、その大きさが想像できた。トランクスがすでに湿っていた。彼は快感に腰を軽く浮かせ歯を食いしばっていた。

私は濡れたトランクスを脱がせて、彼のペニスを引っ張り出した。

「ああっ！」

「すごい……！」

股間から逞しく勃起している彼のペニスは予想通り太くて長い立派なものだった。私はそれを見て思わず生唾を飲んだ。まだ女を知らない、綺麗なピンク色のペニスは時折私の手の中でびくびく震えた。

「あああ……お姉さん……」

私は彼の逞しいペニスを握って上下に動かした。

「ねえ、気持ちいい？」

「あ……はい……」

彼は気持ちよさそうに目を閉じ、荒い息をし始めた。

しばらく手を動かしていると、彼は、「あ、ダメです！」と急に苦しそうに呻いて、腰を震わせた。そのとたん、ペニスの先端から勢いよく精液が飛び出した。白い精液は放物線を描いて私の右腕に付いた。

「きゃっ！」

私は驚いて、手から彼のペニスを離した。

「う……ぐうう……」

彼は腰を震わせてぐったりした。

「ご、ごめんなさい……お姉さん……ぼく……」

「いいのよ。そんなによかった？」

「……はい……」

私は、まさか彼がこんなに早く射精するとは思っていなかったが、経験のない彼にはやはり刺激が強かったようだ。

「ほんとにごめんなさいね。今度はもっと気持ちよくしてあげるから……」

射精してもなお硬いままのペニスを握り、私はゆっくりしごき始めた。さっき出したばかりの精液で手がヌルヌルしていた。

「勝敏くん、私がいいって言うまでイっちゃダメよ。今後は我慢してね」

「あ……はい……」

彼はじっと私の指の動きを見ていた。

「勝敏くん、オナニーはしてるんでしょう？」

「は、はい……」

「オナニーと私にしてもらうのとどっちが気持ちいい？」

「お姉さんの手のほうが……ずっと気持ちいいです……」

私は嬉しくなって、手を先ほどより早く動かした。

「はああ……お姉さん……気持ちいい……」

「だめよ、まだイっちゃだめ……」

私は手のスピードを変えて、彼の顔を覗き込んだ。真っ赤にして気持ちよさそうに目を閉じる彼の顔を見て、私の興奮も最高潮に達した。

「本当に堅いわ……それに、すごく太い……やっぱり若い子はいいわ……」

「はあ……あぁあ……」

彼の声が上ずってきた。

「勝敏くんも、年頃だから、オナニーはいっぱいするんでしょ？」

彼は恥ずかしそうな表情で「はい……」と言った。

「オナニーは一日に何回するの？」

私は手を休めて、彼に聞いた。

「に、二回です……」

「休みの日は？」

「休みのときは……朝から何回でも……」

「若いから濃いのがいっぱい出るでしょう？」

「はい……」

「もっとして欲しい？」

「はい……」

彼が必死に我慢している表情を見ながら、私は指を上下させた。

「おっぱい、好きでしょう？ 触ったことある？」

「ないです……はぁはぁ……」

私は彼の手を取って、ブラウスの中に入れた。

「お姉さん……すごく柔らかい……」

「ゆっくり揉んでみて……」

彼の意識は、私に扱われている自分のペニスとブラジャー越しの私の胸に集中しているようだった。

「気持ちよくなってね……いっぱい気持ちよくなってね」

私はブラウスのボタンを外すと、ブラジャーのホックも取って、自慢のバストを露出させた。

それから彼の頭を引き寄せて、そこに顔を押しつけた。

「舐めて……」

「はぁ……はぁ……」

「乳首吸って……」

勝敏くんは左手で私の右のバストを揉み、右手を私の肩に回して、私の左のバストに吸いついた。

「はぁ……気持ちいいわぁ……」

私はバストを揉まれながら、勝敏くんのペニスを扱いた。

「お姉さん……ぼく、もう……」

「まだだめよ……我慢して……」

「ううう……気持ちよすぎるよ……あああっ！ だめっ！」

ビクビクビク……。

彼のペニスが痙攣したので、私は慌てて彼のペニスに顔を近づけた。

「あああああっ！」

ドクン！

私がペニスを咥えるのと同時に、彼は可愛い声を上げて喉の奥で射精した。喉の奥を彼の精液が直撃し、続いて、ドクドクドクっと、大量の精液が私の喉に注ぎ込まれてきた。

「ん……ぐうう……」

(さっき出したばかりなのに……)

なんとかこぼさずに全部飲み込んだが、すごい量だった。

ジュルジュル……。

私は、まだ堅さを保ったままの彼のモノをそのまま口に含んだまま、首を動かした。

「あ、あああ……」

私の頭の上で、勝敏くんの女の子のような喘ぎ声がした。

若い男の子の体臭を感じながら夢中で啞え込み、私は夢中で首を振った。

「ううう……お姉さん、また……出そう……」

彼も腰を動かした。私の口の中で彼のモノが上下左右に不規則に揺れた。

「うっ、出るっ！」

今度ははっきりと口に出して、私の頭を押さえながら、大量の男の体液を私の口に放出した。

私が顔を上げると、彼が虚ろな表情で私を見ていた。

「お姉さん、僕の精液が口から垂れてる……」

勝敏くんにそう言われて、私は舌を出して精液を舐め取った。

「すごく濃いわ……おいしい……。ねえ、どうだった？」

「気持ちよかったです」

「今、何考えているの？」

「うん……こんなきれいなお姉さんが……僕の精液を……って……」

そう言うと勝敏くんは私に唇を押しつけてきて、舌を捻じ込んできた。

「ん……んんん……」

私もそれに応えて舌を動かすと、ねばねばした彼の精液が、私の舌に絡みついていた。

「今度は、お姉さんのその綺麗な顔にかけたい……」

唇を離れた彼が、はにかんだように言った。

「うふっ、アダルトビデオの見過ぎよ……。でも、いいわ」

彼の股間に目を落とすと、三度も射精しているペニスはもう回復して上を向いていた。

「うふっ、元気ねえ」

「ちんぽがトロけそうなくらい気持ちよかった……」

彼が股を大きく広げたので、私はまたその股間に顔を埋めた。そして、堅いペニスを口に含み、舌を絡ませて首を振った。

「うああ……お姉さん、気持ちいい……」

勝敏くんは、横からうずくまるような格好の私の背中から両手を回して、乳房を揉みしだいた。

「この大きくて柔らかいおっぱい……最高だ……」

しばらく首を振っていると、彼が苦しそうに呻きだした。

「お姉さん……出るっ！」

彼がそう言うと同時に、私の顔を両手ではさんでペニスから離れた。

ドピュッ！

勢いよく発射された彼の精液が、私の鼻を直撃した。

さらに、ピュッピュッピュッと、私の額や頬などに彼の精液が飛んできた。

私が目を閉じてそれを受け止めていると、やがて射精が終わった。

「お姉さん、顔を上げて」

彼に言われるままに、目を閉じたまま顔を上げると、彼が私の顔を見つめていた。

「お姉さん……すごく綺麗だ……」

彼がまじまじと私の顔を見ているので、私は恥ずかしくなってきた。

今まで付き合ってきた男たちにも顔にかけられたことはあったが、こんなに見つめられたのは初めてだった。

「私も気持ちよくしてくれる？」

そんな恥ずかしい言葉はごく自然に口から出た。

「どうするの？」

「私のも指で弄ってくれる？」

彼がおずおずと左手を伸ばして、私の太ももに触れてきた。パンストを履いていなかったの、彼の手が直に感じられた。

「お姉さんの太もも、すべすべして気持ちいいよ」

そう言いながら、私のミニスカートをたくし上げられると、ブラジャーとお揃いの黒のパンティが露になった。

勝敏の左手がパンティにかかり、少しずつ上に上がってきた。

彼の指がパンティのウエスト部分まで来たとき、中に手を入れてくると思っていたが、そうではなくて、さらに上に上がってきた。

そうして、背後から抱きかかえるような格好で、自慢のバストを揉まれた。

「ああ……温かくて……柔らかい……」

乱暴に、そしてときに優しくバストを揉みしだかれ、私の乳首は完全に勃起していた。

「あ、んんん……」

唇を塞がれ、舌を絡め合いながらも、豊満なバストを彼の手で揉まれた。

「あっ」

やがて、右手はバストを揉まれたまま、彼の左手が下りてきて、パンティにかかった。

左手がそっとパンティの恥ずかしい部分に触れたとき、そこはすでにしっとりと濡れていた。

「あああ！」

とうとう彼の手がパンティの中に侵入してきて、ヘアを軽く撫でられたとき、私は恥ずかしい声を上げてしまった。

「凄く濡れてるよ」

「あああ……恥ずかしいわ……」

勝敏は初めて触れる女性器に戸惑っているようだった。

「どう触っていいのかわからないの？」

「うん……」

「じゃあ、教えてあげるわ。もう少し上……その横……あ……その辺り……」

勝敏の指が女のもっとも敏感な部分に触れた。

ビクン！

「あああっ！」

大切な部分を上から押さえられて、思わず身体が反応してしまった。

ビクン……ビクン……。

彼の指で擦られるたび、腰が浮いてしまった。

「お姉さん。ここを感じるの？」

ビクンビクンビクン……。

腰が跳ねるたびに、愛液が下着を濡らしていった。

「雑誌やインターネットで女の人はこちらを感じるって書いてあった……」

「あああ、そうよ……そこを感じるの……」

高校生ならもっとガツガツしていてもいいはずなのに、三度も射精しているからなのか、彼は意外なほど冷静だった。

「あああ……いい、いい……そこっ、そこ……」

乳首を舐められ、クリトリスを攻められて、私のほうが冷静ではいられなくなってきた。

恥ずかしい声を上げ、我慢できなくて腰を震わせてしまった。

「いや、いやあ……おかしくなっちゃう……あああ……」

「どこが？」

「……ああ、恥ずかしい……言えない……」

「お姉さん、こんなに腰を震わせて……今さら恥ずかしいなんて……」

グリグリグリ……。

「だめ、だめえ……」

ビクビクビク……。

私が腰を大きく震わせると、身体の奥から恥ずかしい粘液が出てきて、彼の指と下着を汚した。

「お願い、勝敏くん……もう我慢できないの……イかせて……」

私は、まだ童貞の彼の首に腕を巻きつけて哀願した。

グリグリ……グリッ！

彼が、私のクリトリスを強く摘むと、

「ああ……イク、イク……ああああっ！」

ビクビクビク！

私は彼にしがみつきながら、腰を激しく震わせてイッてしまった。

「お姉さん、いったの？」

心配そうに覗きこむ彼の顔を気だるい気分で見上げた。

「そうよ……いっちゃった……」

私は体を起こすと彼にキスした。

「ああ……もう、もう我慢できないわ」

私は鎌首を持ち上げている勝敏の若いペニスを見て、嘆息を漏らした。

「勝敏くん、そのままジッとしているのよ」

私は、おもむろに腰を持ち上げると、若い勃起棒を手で扱きながら、勝敏の腰を跨いだ。そして、そっと身体を落とした。

「あなたの童貞をいただくわ。いい？　しっかりと女の身体を感じるのよ……」

私がヒクつく太いペニスをそっと握り締め、ゆっくりとその先端を膣口にあてがった。大きな両方の乳房が重々しく垂れていた。大きく開いた自分の下肢がなんともエロティックに見えた。

「あああああ……お姉さん……あっ、うううううう」

割れ目にしっかりと固定されたペニスの切っ先が、ヌルツとした感触で私の膣の中に吸い込まれていく。

「うっ、うぐううう……」

勝敏は咄嗟に全身の筋肉をきつく硬直させた。

グッ、ググッ……

私は唇を半開きにしながら、さらに腰を落としていく。潤いに満ちた淫穴に太いペニス満たされる挿入感は、多大な悦楽以外の何ものでもなかった。

「はあ、はあああああ……き、気持ちいい……」

私はじっくりと味わうかのように、ゆっくりと太いペニスを埋没させていく。私の意識は必然的に勝敏のペニス一点へと集中していた。

「ああああ……固い……固いわ……」

「あうううう……お姉さん……ぼく……ぼく……」

「気持ちいい？　これが、これがおまんこよ！」

ヌルヌルとした粘膜が勝敏の陰茎をねっとり包みこむのを感じる。

勝敏のペニスが放つエネルギッシュな気が、膣内いっぱい淫熱を発散してくる。おもわずキューツと膣の筋肉を締めてしまうのは、力強いペニスの躍動感とこの淫熱のせいなのかもしれない。

激しさを求める淫猥な股間が、私に峻烈なムズムズ感を湧き立たせてくる。ついに我慢できなくなり、私は一気に腰を落とした。

「んあっ、……んふう」

膣内でドクン、ドクン、と脈打つペニスの切っ先が、奥のほうにあるツルンとした子宮口に当たった。

私の唇が切なくわなないた。

「あ、ああ……お姉さん……き、気持ちいいです……うう……」

「んふ……ほら、よく見てごらんなさい……あなたのものがしっかりと私の中に入ってるわよ」

私はガバッと開いた両脚の膝に手をつき、わずかに腰をあげてから勝敏に結合部分を見るよう促した。

あまりの快樂に泣きそうな顔を浮かべる勝敏。窮屈な体勢でググッと首をもたげると、ふたりの結合部分を見つめた。

「どう？」

「うん……すごくいやらしい……」

おそらくDVDの中だけでしか見たことのない男女の結合場面が目の前に広がっているのを見て、すごくえっちな気分になっているだろう。

「どう？ 女の身体って気持ちいいでしょ？」

「い、いいです！ 気持ちよすぎる！」

「ふふ、ちょっと動くわよ」

そう言い、先っぽのほうをわずかに埋没させたまま私がほんの少し腰を引いた。そして、まるで相撲の四股を踏むかのような体勢からゆっくりと腰の上下運動を開始しはじめた。

ズチャ、グチョ、クチャ——

「う、うん、あ、ああ……」

「う、うぐっ、お姉さん……あ、んぐう」

しばらく性器の結合シーンをジッと観察していた勝敏だったが、弓なりに反ったペニスを滑らかな秘壺の壁にズリズリときつく摩擦されだすと、もう観察などする余裕などまるでなくなったのか、ギュッと眼を閉じ、ギリギリと歯を食いしばっていた。

(体験版はここまでです。本編を買っていただけると嬉しいです。よろしくお願いたします。)